

# 白い文字

蕪木寿江

「かぶらぎさん。とおっしゃると、どういう字ですか？」

「あのう、草かんむりに『む』です」

「珍しい字ですね。『ム』こうですか？」

「いいえ、草かんむりに、『な』です」

「？」

「なんにもないの。ないです。大根、かぶのかぶです。野菜のかぶです」私は手で丸くかぶの恰好をする。

「すみません、書いて下さい。」と言った具合で、以前住んでいたところでは見あたらぬ名前、お米屋さんの小僧さんが大僧さんになり、お嫁さんを貰って田舎に帰るまで、「なしきさん」で過ごした。「なしきさん、お米を入れておきましたよ。」台所に入って米櫃を開けて、少なくなった古い方のお米を蓋にのせて、新しいお米を入れて帰って行ってくれ

る。無くなる頃になるといつの間にか来て満していつてくれた。おかげで米なしデーが続くこともなかった。

たまたま行つた外科では、「むきさん、第二診察室に入ってください。むきさん、むきさん、いないんですか。」と、看護婦さんのむきになって叫ぶ声に、はっと驚き、恐る恐る診察を受けたこともあった。

「ぶきさん」と呼ぶのも、全く不器用な私にはふさわしく、又「ブキさん」と、仮名におきかえてみると、又又、似つかわしい。戦後の混乱とした無気力な時代に、一世を風靡したヘイヘイブギウギの歌を思い起すからである。ちよつと学のある人は「かぶきさん」と呼ぶ。役者になつたようだ。詠えの洋服のネームには、「鎗木」というのもある。鎗木清方の子孫のようで少し偉くなつたような気がする。

主人の両親の生まれ育つた市ヶ尾に越して来てからは、蕪木の姓も多く、その後名付け親もない。教材屋さんが電話で、「先生のお名前は？」と必ず聞く人がいる。「かぶらぎです」というと、「はあ？」と聞き返す人には、「あぶらげです」という、「あぶらげ先生ですね」と念を押す。ご父兄の中には「蕪木」と書く方に毎年出会う。十年来、年賀状に母娘で書き続けている。これもしかり——、いつも駈足で走り廻っている私には恰好な名前である。蕪という字は、芭蕉の蕪であり、蕪という字は、蕪村の蕪であつてみれば、俳界に縁もなくもないとか……そこで一句、などと笑うこともある。

昼寝覚め 横向きおれば片眼寝むし

つまぐりて鬼灯の種白く浮かす

笑いたくて蟻螂の貌見ていたり

子等より浮くる砂のだんごと秋の陽と

祝い菓子頬ばり食みて卒園す

大風邪をひいて幼稚園を二日休んだことがある。私が癒って出てくるといふ朝は、小燕共が門の所で待っていてくれた。飛びついたり、ぶらさがったり、ぶったり、押したり、ひっぱられながら部屋迄やっとなどついた。一日が無事に終り、原っぱをぬけて帰るうとすると、木製の物と取り代える為に以前から置かれてあった電柱に何か字らしいものが書かれてあるのに気がついた。「かぶちゃん、かぶちゃん、かぶちゃん………」と、長い電柱が絵のような文字で埋まっている。石を探して書いたのだろうか。私は一つ一つ丁寧に、かすんでくる目を拭きながら読んだ。電柱の終り迄くると「なおてね」と、はすかしそうに小さく書いてあった。——なおてね——。まさに

\*子供は一冊の本である

その本から

われわれは何かを

読みとり

その本に

われわれは何かを

書き込んで

いかなければならぬ

子どもは神の被造物である。子どもから学ぶことのみ多く、一人、一人の本に、一人一人に書き込んでいかなければならないと思いつながら、一体、何を讀みとり、何を書き込んできたのだろうか。

草はらに横たわっていた電柱に浮きでた白い文字が、十数年経った今も、鮮やかに刻み込まれている。

\*一九五三年の夏、当時まだ米英ソ仏四か国の占領下にあったウィーンに会議があつて、二週間ほど滞在した。そのとき、とある幼稚園を羽仁説子さんと二人で訪れて、帰りぎわに、その幼稚園の男の子がおんぶしてというので、おぶって白壁のわきを歩いてきたら、その壁にコンテのような濃い黒で「Das Kind ist ein Buch aus dem wir lesen, und in das wir schreiben sollen.」

（「*Das Kind ist ein Buch aus dem wir lesen, und in das wir schreiben sollen.*」が無造作に書いてあつた。後日、この詩が、ペーター・ローゼッカーという、第一次大戦末に死んだ、オーストリアの人に愛された詩人であることを、ドイツからの或る手紙でわかつた。（周

郷博著 母と子の詩集より）

（神奈川・市ヶ尾幼稚園）